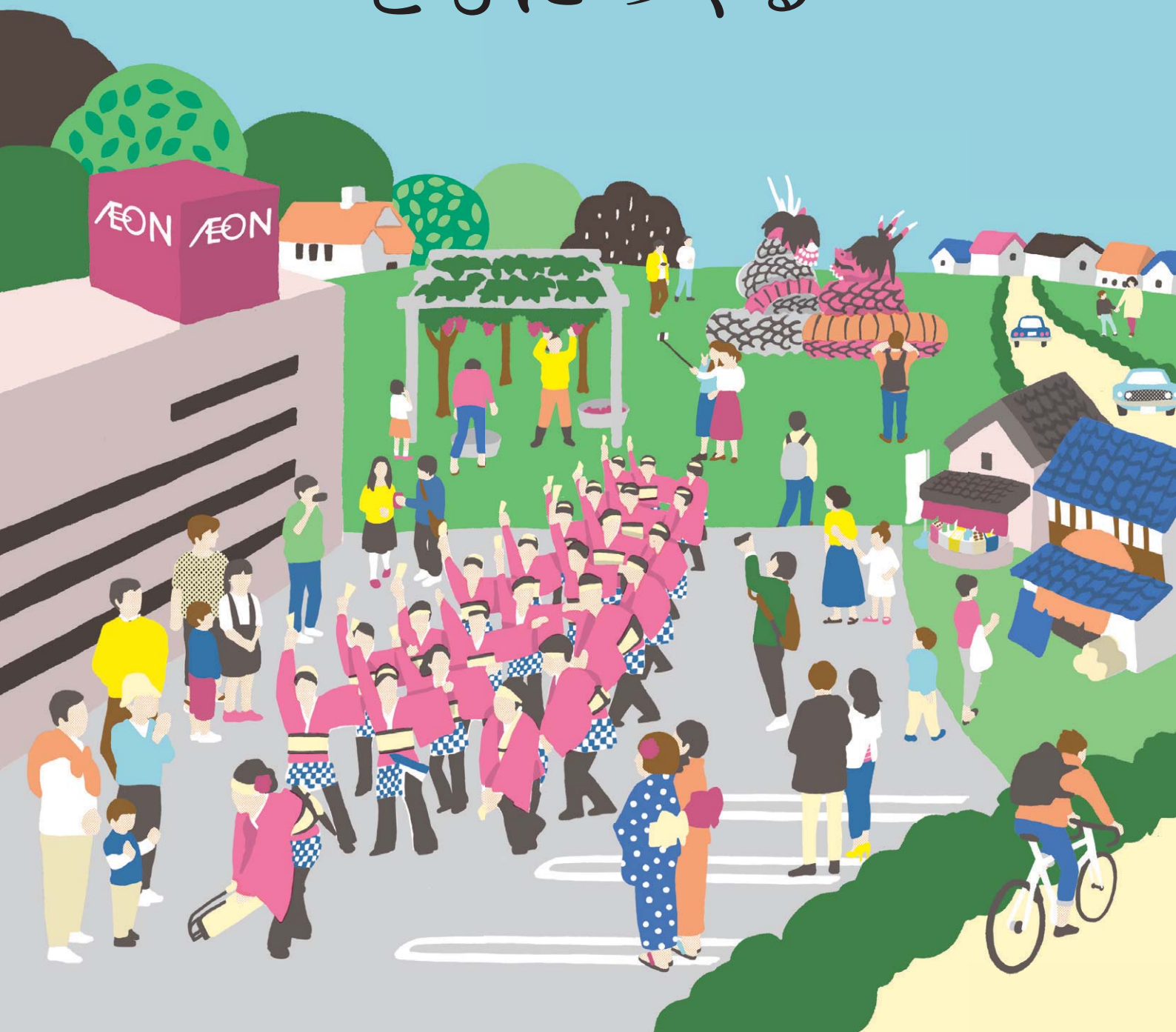
AEON Magazine
November 2018
Vol. 63
Fully Global, Truly Local

Interview
セーラ・マリ・カミングス
株式会社文化事業部 代表取締役

特集
地域の未来を、ともにつくる



特集

地域の未来を、ともにつくる

地域のお客さまのくらしを豊かにするために
イオンにできることは何か。
今号では地域との共創共栄を目指す一例として、
イオンが行う地域文化振興の取り組みや、
その土地ならではの食を発信する事例を紹介する。
巻頭インタビューでは、1990年代から長野県で文化、伝統産業の振興に尽力、
現在は株式会社文化事業部 代表を務める
セーラ・マリ・カミングス氏にお話を伺った。

Illustration by MOMIJI

じものの力 13

赤土が育む柔らかく香り高いゴボウ
明治ごんぼう（岡山県井原市）

標高約４００ｍの高原に赤土畑が広がる井原市明治地区。ゴボウは方言で「ごんぼう」と呼ばれ、同地区で栽培されたものは「明治ごんぼう」の名で親しまれています。粘土質の赤土の中で、一般的なゴボウよりも2〜3カ月長くじっくりと育てられ、太くて柔らかく、香り高く成長します。天ぷらや肉巻きではその柔らかさを、きんぴらやサラダではシャキッとした食感を堪能できる、地元自慢の食材です。

イオンの「フードアルチザン（食の匠）」活動として、地域と連携し「明治ごんぼう振興協議会」を設立。郷土の味を守り続ける生産者の皆さまとのパートナーシップのもと、伝統的な食材や技術の継承に取り組んでいます。 http://www.foodartisan.jp/

Illustration by AYA COHARU

AEON Magazine
November 2018 Vol.63

Cover Art by ASAKO MASUNOUCHI
日常を温かく描き、遊び心を詰めこんだイラストを得意とする作家。イオンのある町で伝統芸能、祭り、特産品などを楽しむ人々を描き、地域に根ざすイオンを表現。

発行日：2018年11月28日
発行所：イオン株式会社
コーポレート・コミュニケーション部
〒261-8515
千葉県千葉市美浜区中瀬1-5-1
TEL：(043) 212-6061
ホームページ：http://www.aeon.info/

この冊子はイオンの情報誌です。
Aeon（イオン）はグループの総称です。
本誌上における社外からの寄稿や発言は、
必ずしも当社の見解を表明してはいません。

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C022794
VEGETABLE OIL INK

contents

01 — じものの力
02 — 特集
地域の未来を、ともにつくる
Interview
文化とは、残すのではなく
活かしていくもの
セーラ・マリ・カミングス 株式会社文化事業部 代表取締役
伝統文化を未来へ受け継ぐ
地域との絆を深める
地域ならではの食を発信する
11 — 企業使命を果たすために ～SDGsの達成につなげるイオンの事業～
13 — 美味礼賛
14 — 決算概要
15 — GROUP NEWS
17 — 日本 中国 ティーンエイジ アンバサダー 10周年記念事業
日本と中国のさらなる友好を目指して

株式会社文化事業部 代表取締役

セーラ・マリ・カミングス

Sarah Marie Cummings

文化とは、残すのではなく活かしていくもの

長年にわたり地域の文化・伝統産業の魅力を発信し続けたセーラ・マリ・カミングスさん。
来日から四半世紀を過ぎて、日本の地域というものに対してどんな考えで臨むのか、長野県にセーラさんを訪ねた。

「地域発展のキーワードはサステナブル。未来につながる社会をつくっていきたい」

Profile

米国出身。1993年長野オリンピックを機に来日。翌年㈱小布施堂入社。1997年、同社取締役。地域の文化・産業振興に尽力し、「日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー2002」大賞受賞。現在は㈱文化事業部 代表。

――1993年に来日したセーラさん。日本の伝統文化、伝統産業に魅せられ、栗菓子の老舗であり、酒造も営む小布施堂・桝一市村酒造場に入社。外国人ならではの視点で地域文化と産業の振興に取り組み、レストランの開設や桶仕込み酒の復活、文化人を招いてのトークセッションの開催などを次々と発案・実行した。長野で25年、時代の移り変わりを見てきたセーラさんに現在の想いと活動を語っていただいた。

人が元気になれば地域も元気になる

来日当初の私は、日本の文化継承に少しでも自分の力がプラスになれば、との気持ちでがむしゃらに行動しました。時が過ぎ、今は各地で自然が失われてきたことに危機感を抱いています。現在、㈱文化事業部を設立し、先人が大切にした山と水の関係などからヒントを得て、農業と里山の再生を目指しながら、地域の発展に取り組んでいます。

地域社会を元気にするには、まず、そこにくらす人たちが元気であることが大切です。人は誰かのために役立っていることを実感すれば心に力が宿ります。人の心の活性化のためには、人が集まり、交流できる場所の存在が大切。日本にはディスカッションをする場が少ないので、違った人と出会えるような「場」があれば、地域社会の活力が強まると思います。交流の場という意味ではオリンピックはまたとない機会。開会式で浴衣を着てもらうなど、日本の文化を体験し、再認識できる場になれば嬉しいです。

地域社会の振興に一番大切なことは、「サステナブル（持続可能）」であることです。持続可能性がなければ社会は発展していきません。伝統や文化を残そうという考えがあるけれど、「残す」のではなく「活かす」ことが大切だと感じています。単に古いものを引き継ぐのではなく、いいものだから、今、そして未来に活かしていこうという考えです。こうした積み重ねが「サステナブル」な活動につながります。

循環型社会をつくり地域の発展を

今は、地域創生を自然環境の側面から考えて、「かのやまプロジェクト」に取り組んでいます。「かのやま」とは「可能な山」との意味も込めています。自然に近い森、山をつくり、美しい水を山から得て、家畜からもらった肥料で、無農薬のリンゴや柿、野菜をつくる、果樹の受粉はミツバチが行うといった古い日本の里山のような循環型社会の実現を目指していくものです。鶏を飼えば、害虫を食べてくれたり、農薬を使わなければ蝶が元気に舞ったりする、こうした昔ながらの知恵や利点を活かしていきたい。まだ道半ばですが、将来の可能性に大きな希望を抱いています。

「意志あるところに道は開ける」ということわざがあります。それを信念に置くことは、25年前から変わらない。これからもこの信念で昔ながらの生活のあり方や、人、自然と向き合っていきます。

イオンのような大型店舗には、いつも明かりがついていて、地域の人たちに安全・安心を提供してくれます。これは心強い付加価値です。地域の商店と共存するビジネスモデルを構築して、WIN―WINの関係を広げていただきたいですね。

例えば、地方には、音楽やダンスなどを練習してもそれを発表する場がないので、イオンの店舗がそういう文化発信の場になればいいと思っています。ほかにも、伝統料理を若者に伝えるイベントを開催するなど、若い世代が文化にふたをしてしまわぬような環境づくりが必要。これは個人レベルで行うには限界があります。イオンには全国に店舗を持つ企業の強みを活かして、各地に文化発信の輪を拡大してほしいと思います。

広島市安佐北区で活動する「亀山子供神楽団」には小学1年生から中学3年生までの26人が所属。本格的な神楽の舞を披露したほか、お囃子も子どもたち自身が演奏した

1回目の演目は「悪狐伝」。悪行をはたらく金毛九尾の狐や、悪狐退治に乗り出す弓引き名人らが登場する物語。迫力満点の舞や豪華絢爛な衣装も見物だ

公演後に実施された「子ども神楽体験教室」では、子どもたちが興味津々で神楽の衣装や和楽器に触れていた

伝統文化を未来へ受け継ぐ

――イオンでは、地域の魅力に触れ、地域へより深い愛着を持ってもらう店舗づくりを目指している。誰もが気軽に立ち寄りやすい環境を活かして、その地域ならではの伝統文化を発信する取り組みもその1つだ。

日々の買物の場を伝統文化を体験してもらう場に

豪華な衣装を着た演者がお囃子に合わせて華麗な舞を披露する広島神楽。秋の収穫を祝う祭事として江戸期に島根から伝来し、広島各地に根づいた伝統芸能だ。現在も県内には約300の神楽団がある。地域ごとに独自に進化してきたため、神楽団ごとに物語や演出方法は多種多様。例えば、芸北地域の神楽は鬼が出てくるのが特徴だ。しかし、近年では少子高齢化や公演機会の減少から後継者不足の問題に対して、いかにして伝統を継承していくかが課題になっている。

こうした中、地域のお客さまに広島神楽に親しんでもらう機会をつくるために、マックスバリュ西日本㈱では店舗で神楽公演イベントを実施している。9月2日に行われたマックスバリュ世羅店（広島県）でのイベントでは、「亀山子供神楽団」が本格的な神楽を披露した。会場では、衣装や和楽器に触れることができる「子ども神楽体験教室」も開催。このほか、「平成30年7月豪雨」で被災したマックスバリュ本郷店（広島県）では9月15日のリニューアルオープン時に「大草神楽子ども研究クラブ」による公演が行われ、被災地域を活気づけた。

広島神楽の普及に取り組む広島広域都市圏〝神楽〟まち起こし協議会事務局の森本貞彦氏は次のように話す。「店舗での公演は、神楽にあまり馴染みがない若い世代へ神楽の魅力を伝えるいい機会となる。伝統を受け継いでいくためにも、神楽に興味を持つ子どもたちが増えてほしい」。

日々のくらしの中で地域の伝統文化との接点をつくるために、イオンは地域の文化の発信拠点を目指していく。

駐車場に設置された特設会場で神楽公演イベントを実施。1日2回の公演で約700人のお客さまが訪れた

地域との絆を深める

――人々がともに力を合わせてつくりあげる祭りは、コミュニティ形成において古くから大切な役目を果たしてきた。地域との共生を目指すイオンは、各地の祭りにその一員として参加し、そこにくらす皆さまとの絆を深めている。

ともに感動し、楽しみ、時を共有する

祭りは、古くからの伝統を受け継ぐと同時に、お客さまとイオンとが顔が見える関係性を築く機会でもある。

イオンは「盛岡さんさ踊りを東北を代表する祭りにしたい」という盛岡市の考えに賛同し、「盛岡さんさ踊り」のパレードに毎年参加している。お客さまと従業員が同じチームで踊るのがチームの特徴。これは参加する企業団体の中ではイオンチーム以外ほとんどない。また、イオン琉球㈱では「一万人のエイサー踊り隊」に従業員がチームとして出場、一丸となって地元のお客さまを楽しませた。福岡県のイオン穂波店では290年の歴史を持つ「飯塚山笠」に従業員が多数参加し、町内会との信頼関係を深めている。

イオンは今後も祭りを通じてお客さまと一緒に地域を元気にし、未来につながる活力を生み出していく。

沖縄

沖縄各店舗から従業員が参加
「一万人のエイサー踊り隊」

本土の盆踊りにあたる沖縄の伝統芸能「エイサー」は県内の各地域で様々な形で継承されており、地域ごとに踊りの型や衣装が異なる。それらが一堂に会するのが、毎年8月に那覇市で開催される「一万人のエイサー踊り隊」だ。イオン琉球㈱は沖縄の伝統文化の普及と継承を目指す祭りのコンセプトに共感し、2015年から毎年「イオン琉球エイサー隊」というチームを結成して参加している。チームには県内の各店舗から従業員60人が集まった。当日はお客さまに楽しんでもらいたいという気持ちを込めて演舞を披露した。

DATA　一万人のエイサー踊り隊
1995年から毎年8月第1日曜日に那覇国際通りで開催されている祭り。約70の団体が様々なスタイルのエイサーを披露しながら、約1.6kmの道を練り歩く。

福岡

町内会の一員として参加
「飯塚山笠」

福岡県飯塚市で開催される「飯塚山笠」は、町内会ごとに構成された「流れ」と呼ばれるチームで巨大な山車である「山笠」を走らせる祭り。クライマックスの「追い山」と呼ばれる行事では「流れ」ごとにタイムを競う。イオン穂波店（福岡県）は店舗が位置する徳前町の一員として2007年から「飯塚山笠」に参加。徳前町では毎年70～80人の「舁（か）き手」が参加しているが、そのうち20～30人がイオン穂波店の従業員だ。巨大な山笠を安全に動かすためにはチームワークが大切であり、全員で取り組む必要がある。イオン穂波店は今後も町内会と一致団結して祭りの継承に貢献していく。

DATA　飯塚山笠
福岡県飯塚市で約290年の歴史を持つ伝統的な祭り。3000人ともいわれる男衆が沿道からの打ち水を浴びながら巨大な山笠を動かして町を疾走する。

岩手

お客さまとイオンが1つのチームに
「盛岡さんさ踊り」

1万の太鼓の群舞が織りなす世界最大規模の太鼓のパレードで知られる「盛岡さんさ踊り」。「来て、観て、魅せられ、加わるさんさ」をキャッチフレーズに、ミスさんさ踊りの演舞、一般団体による踊りのほか、誰でも自由に参加できる輪踊りなど多彩なプログラムがある。イオンではグループ6社※から従業員が集まり「イオンチーム」を結成し、12年連続でパレードに出場している。今年度は従業員45人と一般応募のお客さま120人が参加した。イオンチームは20回以上練習を重ねて団結力を強め、美しい隊列と元気のよい掛け声で祭りに彩りを添えた。

※参加企業：イオンリテール㈱、イオンスーパーセンター㈱、マックスバリュ東北㈱、㈱サンデー、イオンモール㈱、イオンクレジットサービス㈱

DATA　盛岡さんさ踊り
岩手県盛岡市周辺で受け継がれてきた各地の「さんさ踊り」をパレード化。41回目となる今年は8月1～4日に開催された。約250団体、約3万4500人が踊り、のべ130万もの観客が楽しんだ。

地域ならではの食を発信する

その先の、道へ。北海道
Hokkaido. Expanding Horizons.

――地域の食文化や特産品の魅力を発信するために、小売業にできることは何か。イオンでは地元企業と連携して、お客さまとともに地域に根ざした商品開発や生産・販売を行っている。

地域の食文化を盛り上げていく

イオン北海道㈱では、北海道に古くから伝わるアイヌの食文化を広める取り組みを手掛ける。アイヌ料理のレシピをベースにした、道産食材を用いた〝食べるスープ〟の商品化だ。これは、札幌市内のホテルなどが主催した「みらいの『食べる北海道スープ』レシピコンクール」[※1]で最優秀作を受賞したレシピがもとになっている。本コンクールは北海道150年事業の1つ。同社は、地域の食文化を未来に伝えていくというコンクールの主旨に賛同、最優秀作「しかのチタタプの豆乳スープ」のレシピの商品化を担った。アイヌ料理の「チタタプ」は肉をたたいてミンチ状にしたもの。商品化したレシピでは、シカ肉のたたきを団子にし、具沢山スープに仕立てている。シカ肉は流通量が少ないが、地域企業と協力して調達する。コンクールに審査員として参加した同社食品商品部の松井秀之は、「北海道の方であってもアイヌ料理に馴染みがない方が多い。スーパーという身近な場所で買えるようにすることに大きな意味がある」と語る。

※1 センチュリーロイヤルホテルと公益社団法人北海道栄養士会の共同企画で開催されたレシピコンクール

1. 最優秀作を考案した釧路短期大学2年の小椋彩花さん（中央）と所属ゼミの皆さんを交えたイオン北海道㈱の担当者との打ち合わせ。「彩りよく仕上がって嬉しい。商品が店頭に並んだら、みんなに広めたいです」と笑顔の小椋さん。商品は11月末に発売予定
2. 最優秀作の「しかのチタタプの豆乳スープ」 3. 8月20日に行われた決勝大会の審査では、応募作36品のうち、12作品が試作された

――イオンではこのほかにも、多くのお客さまに地域の特産品に親しんでもらう取り組みを全国各地で行っている。

イオン日本酒プロジェクト

イオンのグループの機能を活用して地域の味を全国に届ける活動の1つが、今年で4年目となる「イオン日本酒プロジェクト」だ。イオン埼玉羽生農場でつくった酒米を原料に、イオンリカー㈱と各地の蔵元が協力して醸造する。完成した日本酒は全国のイオンで販売されるほか、カンボジアなどアジアの店舗でも販売する予定だ。

高校生と弁当の共同開発

地元の食材と高校生のアイデアをかけあわせて、地域の美味を詰め込んだ弁当を開発した。イオン北海道㈱は北海道三笠高等学校調理部と共同開発した2種類の特製弁当を道内のイオンの店舗36店で販売。このほか、イオンの「未来共創プログラム」[※2]の一環として福島県立小高産業技術高等学校の生徒とともに考案した弁当は、福島と宮城両県のイオンの店舗約240店で販売した。アンコウ、玉ねぎ、新米「天のつぶ」など相双地域の食材をふんだんに盛り込んだ弁当には、復興への願いと感謝の気持ちが込められている。

地元小学生がブドウの販売を体験

地域企業と連携し、子どもたちに地元農作物の販売を体験してもらう取り組みも実施している。イオン延岡店（宮崎県）では地元小学生が五ヶ瀬ワイナリーで栽培を手伝ったブドウを店頭で販売。子どもたちに地域の特産品に親しんでもらうきっかけにもなっている。

買物を通じてくらしを支えるだけではなく、地域のお客さまや自治体とともに地域の豊かな未来をつくっていくことがイオンの役目。イオンはこれからも地域に根ざし、地域の一員として共創共栄を目指していく。

※2 東日本大震災復興支援「イオン 心をつなぐプロジェクト」事業の1つ。グループ各社の事業特性と被災地のニーズをマッチングして地域課題の解決に取り組む

1. 酒米「さけ武蔵」はイオンアグリ創造㈱が運営する農場で生産。収穫の際はイオンリカー㈱の従業員も手刈りした
2. 3つの酒蔵で醸造され、同じ酒米でも米の磨き方や仕込み方法、その土地の水質などによって酒蔵ごとに個性豊かな味わいに仕上がる

小高産業技術高等学校の生徒が福島県庁を訪問し、開発した「いっしょ食うべ！幸せの恩返し弁当」を紹介

イオン延岡店（宮崎県）で、自ら栽培を体験したブドウを店頭販売する五ヶ瀬町立上組小学校の児童

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

企業使命を 果たすために

国連が採択した「持続可能な開発目標（SDGs）」※1では、豊かさを追求しつつ、地球環境と人々のくらしを守るための国際社会共通の17の目標を定めている。SDGsに結びつくイオンの取り組みを紹介する。

11 住み続けられるまちづくりを　13 気候変動に具体的な対策を　15 陸の豊かさも守ろう

第6回

いきもの共生事業所®認証

自然に囲まれた憩いの場の創出

この植樹活動に加えて、小動物や鳥類などが生きやすい環境をつくる取り組みを強化。2010年、イオンでは生物多様性方針を策定し、店舗の敷地内の設計に対して指針を打ち出した。店舗敷地内の樹木の配置や水の流れなどをいきものの生態に合わせて設計。専門家の知見を交えて考察し、環境整備を行ってきた。

緑あふれる店舗に出向く機会を増やし、憩いの場を

「いきもの共生事業所®認証」は、自然と人との共生を企業活動において促進することを目的につくられた。抽象的事象である生物多様性を「いきもの共生事業所®推進ガイドライン」に沿って定量的に評価するものだ。

2013年に認証を取得したイオンモール東員（三重県）では、水の循環に配慮した「雨の庭™」の仕組みを取り入れた。屋上や舗装面から流れ出た雨水を土壌へ流し、地中へ浸透させ、きれいな水へと浄化させるのだ。さらに「ふれあいパーク」は蝶や鳥などが飛び交うことができるよう樹木や川を配置。地域の子どもたちが環境について学ぶ場にもなっている。

また、2015年に認証を取得し、2016年に同認証の認証団体である一般社団法人 いきもの共生事業推進協議会（ABINC）※2より特別賞を受賞したイオンモール多摩平の森（東京都）では、「緑あふれる美しい庭」をコンセプトに地域の新たなコミュニティ拠点を目指した。植樹に加え、既存樹木も敷地内で移植や保存を行い、緑地帯として「木漏れ日の広場」を整備。屋上には、いきものの生息空間になるビオトープ「丘の原っぱ」を設けた。こうした環境は、いきものが棲みやすいだけではなく、お客さまのやすらぎの場として利用されている。

このほかにも、巣箱の設置や、緑豊かな森をつくり人々が散策できる遊歩道の整備などの様々な工夫・取り組みを各地で展開。現在では認証事業所として7つの店舗※3で評価をいただいている。

いきものと共生していく環境開発とその検証に対する評価として、認証取得は一つの結実ではあるが決してゴールではない。新規開設店舗のみならず、既存の店舗にもこうした取り組みを広げ、今後も継続していくことが大切だ。イオンでは、これからも土地の特性を活かし、いきものと共生しながら、地域の人々が気軽に訪れ、憩いを得られるコミュニティ拠点づくりを進めていく。

1. 四季折々の草花を楽しめる「四季の森ガーデン」イオンモール多摩平の森（東京都）　2. 豊かな緑地とせせらぎのプロムナード イオンモール堺鉄砲町（大阪府）
3. いきものが棲みやすい環境空間「ふれあいパーク」イオンモール東員（三重県）　4. 緑豊かな森「きゅりお」に設置した巣箱 イオンモール常滑（愛知県）

生物多様性とは、3000万種ともいわれる地球上にいる多様ないきものたちの豊かな個性同士のつながりのことだ。生態系の破壊が深刻になる中、1992年に生物多様性条約が国連環境開発会議（地球サミット）で採択された。2016年には約200カ国が参加し、世界中で種の保全・保護の取り組みが強化されている。こうした動きの中で、持続可能な新たな共生関係をつくり出す企業・事業者による自主的な活動が強く求められている。

お客さまとともに、自然との共生空間をつくる

イオンでは、91年から「イオンふるさとの森づくり」の名のもとに新店舗開設時の植樹活動を継続している。この取り組みは環境保全にとどまらず、地域のお客さまとともに行うことで、店舗が集いの場になるようにと願い実施している。その土地に自生する樹木を数十種類取り混ぜて植樹し、成長を競い合わせることで自然林に近い環境が育まれる。植樹を行った店舗の敷地では、剪定の行き届いた造園植栽に比べて、数年後には野鳥の飛来率が数倍も多くなったという調査結果が得られた。

「イオン ふるさとの森づくり」植樹祭で地域にお住まいの方々と約1万本の苗木を植樹 THE OUTLETS HIROSHIMA（広島県）

いきもの共生事業所®認証について（都市・SC版）

一般社団法人　企業と生物多様性イニシアチブ（JBIB）が定める「いきもの共生事業所®推進ガイドライン」土地利用通信簿®に基づくもの。認証基準として、「生物多様性に貢献する環境づくり」「生物多様性に配慮した維持管理」「ステークホルダーとのコミュニケーション」「地域の希少種の保全への取り組み」などを評価し、オフィスビルや商業施設の持続可能な土地利用を認証する。

ABINC

※1 SDGsの詳細は、国連広報センターのホームページ内にある「2030アジェンダ」でご覧いただけます
※2 Association for Business Innovation in harmony with Nature and Communityの略称
※3 認証を取得した7店舗：イオンモール東員（三重県）、イオンモール多摩平の森（東京都）、イオンモール常滑（愛知県）、イオンモール堺鉄砲町（大阪府）、イオンモール四條畷（大阪府）、イオンモール長久手（愛知県）、イオンモール松本（長野県）

美味礼賛

食は、健やかな日々をつなぐ糧であり、
各国の風土や価値観を物語る文化でもある。
そして、おいしい食のあるところには、
人々の笑顔があふれている。
今号では、そんな笑顔をつくり出す
日本・中国・フィリピンの
「縁起をかつぐ麺料理」に美味礼賛。

年越しそば

【災厄を断ち、翌年の福を迎える】

そばは長いことから「長寿」を表し、
また、切れやすいことから「災厄を断つ」という意味を
併せ持つ。大晦日に「年越しそば」を食べる風習は
江戸時代に広まった。エビは長寿、卵は繁盛など
のせる具にも翌年の願いが込められている。

JAPAN

パンシット

【祝宴で長寿を願う】

「パンシット」は、中華麺やビーフンなどの麺と野菜や肉を炒めた料理。
麺に「長寿」の願いを込めて誕生日や祝い事に食される。
フィリピンレモンとも呼ばれるカラマンシーを搾り、
爽やかな香りとともに楽しむことが多い。

PHILIPPINES

CHINA

一根面（麺）

イィ グァン ミィエン

【1本の長い麺で家族の幸せを祈る】

「一根面」は切れ目のない1本の麺が特徴で、四川省でよく食されている。
小麦粉を長くのばし、3mほどもある1本の麺に、スープと具を合わせた料理。
誕生日や長寿の祝いなどの慶事に食し、幸せを願う。

イオン㈱ 連結決算概要

2019年2月期第2四半期

営業収益は8期連続、営業利益、経常利益とも過去最高を更新

当第2四半期累計期間の連結業績は、営業収益が8期連続で過去最高となる4兆2,664億円を計上、営業利益898億円、経常利益908億円と、ともに過去最高を更新しました。すべての事業セグメントで増収となり、営業利益においては6事業で黒字となりました。

GMS（総合スーパー）事業では、イオンリテールが4店舗の新規出店と18店舗の既存店活性化を実施。「まいにち夜市」の取り組み強化による夕刻の売上高改善に加え、売価変更の削減やトップバリュ売上高の伸長を受け、営業損益は前年同期差で30億円改善しました。

SM（スーパーマーケット）事業では、マックスバリュ各社が地域特性に合わせた品揃えを強化したほか、U.S.M.Hおよび同連結子会社は共同での商品企画・調達を推進、オペレーションコスト削減にも努めました。

ヘルス&ウエルネス事業では、ウエルシアホールディングスおよび同連結子会社が既存店活性化により、ドラッグ&調剤・カウンセリング・深夜営業・介護を4つの柱とする「ウエルシアモデル」を積極的に推進。お客さまへの安心の提供と利便性向上を目的とした24時間営業店舗の拡大や調剤売上の伸長により好調に推移しました。

総合金融事業では、イオン銀行のインストアブランチの全店直営化によりシームレスな金融サービスを提供、外貨預金や住宅ローン等、預金や貸出金残高が順調に推移しました。

ディベロッパー事業では、イオンモールが国内において既存の2モールの増床と、5モールのリニューアルを実施。また、アセアン、中国で展開するモールの黒字化が進み、同社海外事業は黒字転換しました。

国際事業も中国、アセアンともに業績改善が進み、黒字転換しました。

「まいにち夜市」では食品売場の品揃えを強化。スマートフォンのアプリでお得なクーポンも配信し、18時から20時の売上高は前年実績を超えて推移

2019年2月期第2四半期（累計）事業別業績 ※1

単位：億円

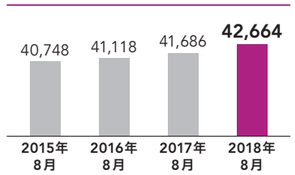
	営業収益		営業利益	
	当第2四半期	前年同期比	当第2四半期	前年同期差
GMS（総合スーパー）事業	15,346	100.7%	-58	+40
SM（スーパーマーケット）事業	16,298	100.4%	111	+2
ヘルス&ウエルネス事業 ※2	3,948	113.3%	136	+6
総合金融事業	2,117	107.0%	319	-9
ディベロッパー事業	1,781	108.0%	254	+19
サービス・専門店事業	3,953	101.2%	137	-23
国際事業	2,204	108.1%	5	+17
連結合計 ※3	42,664	102.3%	898	+48

※1　当期の会計方針および表示に合わせて過年度実績を修正しています
※2　ドラッグ・ファーマシー事業を名称変更しています
※3　連結合計には、各事業の合計のほか、その他事業の実績および調整額が含まれています

連結業績

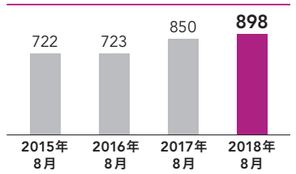
単位：億円

営業収益



単位：億円

営業利益



2019年2月期 業績予想

単位：億円（　）内は前年比

営業収益	営業利益	経常利益	親会社株主に帰属する当期純利益
87,000 （103.7%）	2,400 （114.1%）	2,400 （112.3%）	350 （142.7%）

GROUP NEWS グループニュース

8/24 ミニストップ「浜松増楽店」で国産FSC®認証材をイートインコーナーに使用

ミニストップ㈱は、FSC®認証※材である静岡県浜松市の天竜材を使用した「浜松増楽店」をオープンしました。イートインコーナーのテーブル・椅子・壁などの内装に使用。木のぬくもりを感じながらくつろげる空間になりました。同社は2009年より、環境に配慮する認証材を使った店舗建設を推進。2018年8月末現在、全国でのべ271店舗を展開しています。

※FSC®認証：適正に管理された森林から切り出された木材・木材製品であることに与えられる認証

FSC®認証材である天竜材を使用した
イートインコーナー（ミニストップ浜松増楽店）

8/8 「中国イオン チアーズクラブ」北京で全国大会を初開催

小中学生を対象に環境学習の場を提供する「中国イオン チアーズクラブ」が中国において初の全国大会を北京市で開催しました。今大会には、77クラブ、約2,000人の子どもたちの代表として7エリア（北京・天津・青島・蘇州・武漢・広州・香港）のクラブから27名が参加。各クラブの活動報告の紹介、キャンプ、夜間昆虫観察会などで自然環境への理解を深めました。

全国大会に参加した子どもたち

7/11 再生可能エネルギーの利活用でエネルギーの地産地消促進を目指す

イオンディライト㈱は、経済産業省によるエネルギーの地産地消に係る促進事業の補助事業者として採択されました※。同事業は福島県郡山市西部第一工業団地を対象に、低炭素エネルギーサービスの事業可能性を調査するもの。太陽光発電や廃棄物発電などの分散型電源を導入し、電力需給の最適化を図る独自のシステムを構築して、2020年度の事業開始を目指します。

※㈱エディソン・福島県郡山市・デジタルグリッド㈱とともに行う共同事業

7/6 海浜環境保全活動に寄与する「ikka」支援Tシャツを発売

㈱コックスは、全国の「ikka」「ikka LOUNGE」の店舗・WEBストアで「ブルーオーシャンプロジェクト」支援Tシャツを発売※しました。同プロジェクトは、絶滅危惧種のウミガメを中心とした海洋動物や海浜環境の保全などを行う取り組み。支援Tシャツには音声と画像で説明する「しゃべるタグ（QRコード）」を付け、活動の理解と周知の拡大に努めています。

※販売額の一部をNPO法人日本ウミガメ協議会に寄付しています

ウミガメの刺しゅうを施した支援Tシャツ

イオンの電子マネー「WAON」（新規発行）

「くしろWAON」
9月8日発行

累計発行枚数
約7,301万枚（2018年9月末現在）

「イクボスアワード」表彰式（10月18日）

TOPVALU グリーンアイ Organic

8月21日より、トップバリュ初の国際オーガニック認証取得のスキンケア化粧品シリーズ「トップバリュ グリーンアイオーガニック geo organics（ジーオ オーガニクス）」9種類を全国約450店舗で発売。世界的に信頼性の高い国際認証を取得し、継続して使用いただけるお手頃価格のオーガニック化粧品に仕上げました。

日本とインドネシアのボランティアによる
マングローブの植樹

厚真町への支援金贈呈式。宮坂尚市朗厚真町町長（中央）、
山本百合子イオン環境財団事務局長（左）、
本田陽生イオンワンパーセントクラブ事務局長（右）

9/27 ダイエー四条畷店の店長が「イクボスアワード2018」グランプリを受賞

厚生労働省の「イクボスアワード2018」で、㈱ダイエー四条畷店の岩切尚子店長がグランプリを受賞しました。同賞は部下の仕事と生活の両立を支援する管理職「イクボス」を表彰するもの。今回の受賞は、この支援に加え、将来のイクボスの養成に向けた取り組みや業務の改善、一人ひとりの強みを活かした店舗経営などが評価につながりました。

9/22 中国・武漢市の中心地に「イオン武漢金地店」をオープン

永旺湖北商業有限公司は、中国湖北省の政府機関が駐在する省政治の中心地、武漢市の武昌エリアに「イオン武漢金地店」をオープン。同店は、出来たての商品を取り揃えたデリカコーナーや、品質や鮮度にこだわった果物・野菜や水産・畜産物など豊富な品揃えで充実した食品コーナー、人気店が出店するフードコートなどを展開。快適かつ便利に買物をお楽しみいただけます。

9/22 国交樹立60周年記念事業 第2期「インドネシア ジャカルタ植樹」を実施

（公財）イオン環境財団は、第2期「インドネシア ジャカルタ植樹」の第1回植樹を実施しました。2011年から2013年に行われた第1期の植樹に続くもので、第2期は日本とインドネシアの国交樹立60周年を機にスタート。防災林再生のため、3年計画で3万本の植樹を行います。今回は、両国のボランティア1,000人の皆さまと1万本のマングローブを植えました。

9/16 北海道胆振東部地震の被災地に緊急支援金を寄付

北海道胆振東部地震の被災地に対する緊急支援金として、（公財）イオン環境財団並びに（公財）イオンワンパーセントクラブは厚真町に合計1,000万円を支援しました。また、9月19日にイオン環境財団は、むかわ町に300万円を贈呈。両町の皆さまとは、かねてより植樹活動※を通して交流を深めてきました。1日も早い復旧・復興を祈念します。

※（公財）イオン環境財団は、植樹活動をむかわ町（2012年～2014年）と厚真町（2015年～2017年）の両町で過去6年間にわたり実施

Japan-China Teenage Ambassadors 10th Anniversary Memorial Program

Aiming for Further Friendship Between Japan and China

中日小大使 10周年纪念活动

愿中日友好更上一层楼

日本 中国 ティーンエイジ アンバサダー 10周年記念事業

日本と中国のさらなる友好を目指して

1. To promote friendship between Japan and China, the "Declaration of the Future Friendship between Japan and China" was discussed and decided upon as a guideline for the future　为促进中日友好，研讨制定了面向未来的指针"中日未来友好宣言"　**2.** Goodwill ambassadors of both countries smiling with the 10th anniversary memorial logo in hand　微笑手持10周年纪念徽标的中日两国小大使　**3.** Ambassadors surrounding Chinese Ambassador to Japan Cheng Yonghua and Honorable Chairman and Advisor Okada　围绕中国程永华大使和冈田名誉会长顾问的小大使们　**4.** Chinese participants performed a traditional dance　中国参加者表演传统舞蹈　**5.** Commemorative photo taken with all the past participants　各届参加者集体纪念照

1. 日中友好促進のため、未来へ向けての指針となる「日中未来友好宣言」を議論し決定　**2.** 10周年の記念ロゴを手にする笑顔の両国親善大使　**3.** 中国程永華大使、岡田名誉会長相談役を囲むアンバサダーたち　**4.** 中国の参加者は伝統舞踊を披露　**5.** 歴代参加者全員での記念撮影

Friendship Building for 10 Years, Heading Towards the Future

The Aeon 1% Club Foundation has been hosting the "Teenage Ambassadors" Program since 1990 to provide opportunities to high school students in Japan and other countries mainly in Asia to visit each other's countries and engage in international exchange. The mutual exchange with China began in 2009, and the Foundation invited past participants to Japan for a reunion to celebrate the 10th anniversary of the program which was in July of this year. In hopes that the young people who will lead the futures of Japan and China will further deepen their mutual understanding, we will continue activities to contribute to the friendship and goodwill of both countries.

Aeon 1% Club Foundation　The major Aeon Group companies donate 1% of their pre-tax profits, and the Foundation engages in projects with the main themes of "Sound Development of the Next Generation," "Promotion of Friendship with Foreign Countries" and "Sustainable Development of Regional Communities."

10年友情 迈向未来

公益财团法人永旺1%俱乐部自1990年起，以亚洲为中心，开展了日本与各国高中生的互访交流，即"小大使"活动。该活动与中国的互访交流始于2009年，今年迎来了10周年纪念，于七月邀请历届小大使重聚东京，举办同窗会纪念活动。永旺今后也将积极举办促进两国友好交流的活动，真诚希望身为国家未来栋梁的青少年们深化对彼此的理解。

公益财团法人永旺1%俱乐部　从永旺集团主要企业的税前利润中提取1%的金额，用于推进以"保障肩负未来的青少年的健康成长"、"促进日本与其他国家的友好交流"、"促进地区社会的可持续发展"为中心的各种活动。

10年築いた友好、そして未来へ

公益財団法人イオンワンパーセントクラブは、1990年より、アジアを中心とした国々と日本の高校生が互いの国を訪問し、交流する「ティーンエイジ アンバサダー」事業を行っています。中国とは2009年に相互交流を開始。10周年を迎えた本年7月、歴代の参加者を東京に招き同窓会を開催しました。今後も、日本と中国の未来を担う若者たちがより一層互いの理解を深めていくことを願い、両国の友好・親善に資する活動を続けて参ります。

AEON 1% Club Foundation

公益財団法人イオンワンパーセントクラブ

イオングループ主要企業の税引前利益1%相当額の拠出により、「次代を担う青少年の健全な育成」「諸外国との友好親善の促進」「地域社会の持続的な発展」を柱に活動しています。